



審査を終えて

第三十八回展 大会審査部長

加藤 東陽

栄えある高円宮賞をはじめ、各賞を受賞された皆様にご心からお祝い申し上げます。

第三十八回高円宮杯日本武道館書道大展覧会は、コロナ禍という厳しい環境の中、北海道から沖縄まで全国各地からの出品があり、その数も昨年を上回るなど、充実した展覧会となりました。皆様の熱意とご支援に厚く御礼申し上げます。

本年度は、毛筆の部一万四千四百二十点、硬筆の部七千三百四十二点、合計二万一千七百六十二点（昨年比千五百七十七点増）の出品がありました。この中で、今年も外国から百七十九点、特別支援学校等からは二十三点の力作が寄せられたことや、毛筆の部では九十九歳の方が、硬筆の部では九十歳の方が入賞されたことも特記されましょう。

審査は、六月二十六日（日）、日本武道館第三小道場において、事前に「一流一派に偏ることなく公平・中正に」との審査方針を確認し合い、毛筆の部十九名、硬筆の部九名の審査委員によって厳正に行われました。

次に、今回の審査に当たって所感を述べます。

〈毛筆の部〉幼児・小学校・中学校部門では、全国各地から入賞作が偏りなく選ばれたことは大変良かったと思います。また、上位作品は基本点画や字形などの基礎基本をしっかりと身に付けた作品が多く、レベルの高さを感じました。また、学年の書き方を間違えるなど、うっかりミスが見えられたことは、誠に惜しまれます。

高校部門では、臨書作品が多く、漢字の作品に技能も高く、鍛錬された筆力等、レベルの高さを感じました。また、仮名作品で、首尾一貫した集中力・筆づかい等で高い評価を得た作品も数多くありました。

大学・一般部門では、仮名創作に技量の優れた作品が目立ちました。漢字では、今年は宋・明・清代の行書作品をはじめ、書体も楷・行・草・篆・隸と多岐にわたっており大変良い傾向だと思いました。

〈硬筆の部〉小学校低・中学年では、「とめ・払い」や「美・風」などの字形が上手に書いていました。また、高学年では「行書き」で、文字が大きすぎるため、苦慮している作品が多くありました。

中学校部門では、全国の幅広い地域からの出品があり、特に紙面の天地の余白のとり方など、優秀な作品が多くありました。また、高校・大学・一般の部門では、多くの作品で、行の流れや線質は熟れており、大変よかったです。更なるレベルの向上を期待します。

終わりに、本展が書写書道教育の一環として、文字文化を大切にして、ますます充実・発展していきますよう、皆様の一層のご支援と協力をお願いし、講評といたします。